

# 太 棹



老男  
しやま面

第  
百  
二  
號

東 京 太 棹 社 發 行

# チカラミ に 腸胃

東京市日本橋區濱町二ノ十  
新潮製藥株式會社  
電話 茅場町三八一三番  
原野東京七〇一〇八番

## 幸 松

すき焼

和洋御料理

淺草公園 (千束二ノ三四)

牛鍋本店

電話根岸 (87) 〇三八〇番  
二〇〇〇番

風流・金ふら・茶漬

【美地句】

去月屋

新橋二ノ八  
電銀二〇八



太 棹 第百二號目次

ラヂオ淨曲漫評……………金 王 丸(九)

義 太 夫 雜 話……………齋 藤 拳 三(三)

名人豊澤松太郎師を偲ぶ(二)……………川 端 柳 蛙(四)

『太 棹』總 目 次 (二)……………川 口 子 太 郎(七)

會 報……………森 三 好(七)

新作淨瑠璃

昭 和 軍 神 譽 西 住……………近 江 清 華 作(二)

奮 戰 勲 の 段

戲 曲 の 人 名……………豊 島 丘 山 人(二〇)

義 太 夫 い ろ は 歌……………森 三 好(二〇)

太 棹 社 彙 報……………(三)

當 座 帳……………(三)

編 輯 後 記……………芳 生(三)

表 紙 ・ カ ッ ト……………宮 尾 し げ を……………

新 作

昭和軍神譽西住

奮戰勳の段

近江清華作

淨瑠璃

## 軍神西住戰車長

一

かへらじとかねての覺悟、無き數に、名をぞ留めぬ小次郎が、小さき命、鴻毛の、大君に捧げまつり、散りぎわ清き山櫻、薩摩軍人の名に恥ぢず、徐州戰にぞ、散りにける。

げに、昭和の軍神と、靖國神の神居（宮居）にぞ祭られたるこそ尊けれ。

時は、昭和十三年五月の末。服裝襖々しく左腕には「從軍記者」の腕章を、肩には寫眞機右手には、鉛筆これぞ、光輝ある、偉勳をたてし、つわもの、まことを銃後に書き送る。矢彈の中に、命を的、銃をもたざる報道陣の勇士なり。

詞「戰車隊の人。誰れかここに、西住中尉をよく知つてゐる人はゐないですか。」

記者は、たづねる、西住中尉、在りし日の人格、武勇の物

語。故國日本の人々に、一時も早く報道し、武勳を後に傳えばや。

詞

「はッ……新聞記者どのでありますか。西住戰車長のことでしたら、私に話させて下さい。」

「こら、貴様、狡いぞ！ 西住戰車長殿については俺が本家だ。」

記者「はッはッはッ……本家はよかつたな。誰でもいい、一番西住中尉、いや、今は大尉になられたが、大尉殿について詳しい人が話してくれ給へ。君たちが新聞に飢てゐるやうに、銃後に對して、かういふ立派な働きをした將兵の話を充分、傳えておくことが、我々の任務ですからね。」

兵の一人は、うしろから、皆をかきわけ、前に進んで云ひ出す。

詞

「はッ！ 新聞記者どのでありますか。私は高松と申し

ます、上等兵であります。私は亡き大尉殿に教育された兵でありまして、大尉どのが戦死をいたされました時、親しくこの手で……この手で……」

と聲つまらせ、さしうつむく。

「おい泣く奴があるか！ 新聞記者どのの前でみつともないぢやないか。」

たしなめつつも兵たちは、顔見合せて、無念やと落す涙の一と雫。あの剛快な隊長に、朝夕親しく教へを受け、死線もともに越えて來し、昨日を思へば、樂しきこと、苦しきことのおれこれと、悲憤の情のこみ上げて、皆々しばし聲もなし。

詞「はッ……泣けるのであります。思ひ出す度に泣けて泣けて仕方がないのであります。この手で御介抱申上げたのです。そして、この手の中で、息を引取られたのであります。だから、私に、この高松上等兵に話させて頂きたいのであります。」

記者「きかせてくれ給へ。」

兵の眞情に打たれしや、從軍記者は、姿勢を正し、眞摯の面にぞペンをとる。

詞「情け深い隊長だつたさうだね、しかし、なかなか、規

律の厳しい人だつたさうぢやないですか。」

詞「はッ……情けは人に一倍の、されど一度軍規とならば峻厳を極められました。御承知のやうに、歩兵工兵の第一線に活躍する諸兵の機械化部隊によせてゐる信頼は、銃後

諸君の御想像以上のものであります。又危険も一番甚しいのであります。例の白壁の家を爆破した翌朝、糶秣を取りに参りました我が隊の一兵士が、御禮だといふて主計將校どのから、どつさりミルクを貰つて歸りました。その兵は自慢だつたのであります。

このミルク、ミルクは負傷兵の飲む大切な飲物だ。その大切なものをこんなに貰つて來て濟むか、すぐとつて歸つて返して來い。いたく叱責せられたる、此の兵士も、折角の禮にと貰ふたミルクをば、又も、もどしにゆく。すがた、か的主計將校どの、欣ばしげに

詞「ウレシイ。戦車隊はエライナア。それでこそ日本軍人だ。」

しかしといふて兵を留め、これならきつと叱られまい。ぜひお禮にと酒の瓶、もたせば一禮ニコくと、もと來し道を一目散。

記者「立派な話だね、内地へのいい報道になる。有難う。では一つ誰か、西住戦車長の實戦の有様を語つてくれ給へ。」

私も我もと、語りたし亡き隊長の殊勳談。されど、功を誇らぬ隊長の、さぞや地下にて苦々しく、莫迦めツ！と苦つておいであらう、思ふと兵は顔見合せ、暫し、思案にふけてゐる。

詞「おい、遠慮なく新聞記者どのに西住の實戰譚を語つて

あげい。銃後の人々が、どれ程、力強く思はれるか分らんからな。』

後ろの方に聲ぞある。ハツトふりむきみるなれば、西住大尉の部隊長、細見大佐殿。ハツと愕おどろき一同は直立不動の姿勢なり。靜かに微笑み、記者を見て

詞「西住は立派な軍人でした。私は自分の部下として實に誇りに思ふ。ただ、西住といふ男は、黙々と義務を果し決して功を誇らぬ男だつた。本来、かうして、我々が西住の戦功を語ることさへ好まぬのかも知れん。けれども我々は正しい義務としても、亦銃後國民の熱烈なる愛國心の前にも、この精神は傳えておかねばならんと思ふ。その精神をあくまで誤解なきやう傳へなければならんと思ふのだ。』

西住中尉が、勇名を天下にとどろかせたる戦闘は南翔馬路灣の戦闘なり。

詞「兵士」『昨年十月三十一日でありました。西住大尉殿には、隊長代理としてこの戦闘に加はれたのであります。』この日の敵勢、味方にまさる十倍。射ち出す弾は雨霰あられ。戦ふうちに夜に入る、戦車の戦、困難と、されども小次郎退かず。無二無三に突進せり。

詞「暗夜に、ただ一車で、前後左右に敵を薙ぎつつ、奮戦活躍せらるる隊長戦車は、敵軍の好個の目標たすまとなり、降り灑ぐ敵弾は、戦車の装甲板に命中してははね返り、其

度々に、火を吐き出し、闇の中に火の柱を、此の間敵の手榴弾に前照燈は破壊され、戦車の真正面に大孔おほななを開けてしまつたのであります。しかし隊長は危険を忘れ、後退されず。操縦手、射手に身を片隅に避けさせ、御自分分は戦車の天井にぶら下つて、またを開いて指揮戦闘。』怒れる巨象の密林を踏み荒れ廻るもの凄さ。阿修羅の如き奮戦に、敵も恐れをなしたるや、遂に陣地をすてて退却せり。

今宵も役目果せしぞ。いざや本部に引上げん。振りかへりつつ小隊の戦車を數へみるなれば、愛する部下の山根隊、いづこへゆきしや見當らず。

はツと愕く小次郎中尉、矢弾、ふり來る敵弾雨。ものかはせじと戦車をすてて

『山根！ 山根准尉はどこだ！ 山根。』  
部下の留むるもきかばこそ、聲ふりしほり叫びつつ、血を吐く思ひ求めにけるぞ床ゆかしけれ。

早や夜は更けて、星もなし、死屍壘々あまつさへ、血河流れて瀧津瀬の死臭はむツと鼻をつく。あやめ分らぬ闇の中、手にとる如くきこゆるは敵將校の號令と、わめきぞ騒ぐ聲のみぞ。

詞「敵陣深く二時間餘り、遂に山根准尉を探しあてられ。山根居つたか。おお、よかつた、よかつた、と繰返し、繰返し、しつかりと、山根准尉殿の手を握つて男泣きに

泣かれ、山根准尉殿もこれまた感極まつて、泣いてしまはれたのであります。』

猛きが故に武士は、尊からずと我國の武士道こそは教へける。智と勇と仁義を兼ねてますらをの、うすくれないの櫻花、大和の庭にぞ咲き競ふ。

詞「高松上等兵、お前代れ、代つて戦死の有様を新聞記者どにお話しろ。』

「はッ!」  
いらへて進む高松上等兵。まなこを閉じて亡き隊長に黙禱捧げ。

詞「去る五月五日。端午の節句に行動を起した我軍は、五月十七日快速を利し、宿縣附近に於いて、愈々徐州總攻撃の火蓋を切つたのであります。この日、私は西住戦車長と同乗、高橋隊に屬しました。大尉殿は、

「お、今日は皆鐵甲をかぶれよ。相當の戦になるぞ。」  
珍らしきことのあるものかな、己も甲を打頂き、靜かに瞑し、東天をぞ、拜されける。

御稜威は、高く身は低し、武勳輝やく西住戦車隊、初陣以來功高く、三十有餘の激戦にぞ。

詞「お母さん! 小次郎が今日の働きをこらんなさい。小さな聲で、かう母上にお別れの言葉をお告げになつたのであります。』

古の武士の道には、名を惜み、大義に死すと訓へけり。

死を輕んじて名は重く、君を欽仰、日に忠功を盡すとあり。

海ゆかば水漬く屍  
山ゆかば草蒸す屍

大君の邊にこそ死なめ

願みはせじ。

大君のまします方を伏し拜み、慈愛の母にも別離を告げ、今ぞ、思ひにかかる雲もなし。

詞「去る二月、南京に於いて長くも朝香宮殿下には西住戦車に残る敵弾の跡、餘り多き有様に、打愕かせ給ひ、西住大尉を召し、

「この戦車は尙使へるか」との御謎。

西住隊長、この御言葉を有難し、武門のほまれ、無上の光榮と涙に濡れて頂きぬ。

今日も見事な働きを、頼むと愛車、うちなでつ、三十四回の戦鬪にぞ、いで加はらんと勇み立つ。

年齢僅かに二十と五歳。花なら蕾若武者ぞ。

眼に涙、うちたたへ、高松、語りつづければ、記者も兵もきく人の、新な涙に亡き大尉在りし日をぞしのびけん。

詞「隊長には、日頃愛唱の

武夫の譽なりけり大君の

御楯となりて朽ち果つるとも

の和歌を口づさみながら、靜かに戦車の人となられたのであります。』

たちまちおこる彼我亂撃。

如何に敵壘堅くとも矢彈の數のしげけれど、われは正義の師なり。討て惡逆の中央軍！ どつと雄叫び突き入れば、敵陣爲めに浮足立ち、一線、二線、突き崩す。銃劍かざし突撃の歩兵掩護して西住中尉、滿身創痕の戰車を驅り無人の野をぞゆくごとし。

敵百萬を擁すとも、正義の劍はさげがたし、阿修羅の如き西住戰車、どつと崩れて敵の軍、それ一兵も餘さずに殲滅せよや、打ち崩せ、逃げ足早き敵の勢、手をゆるめずに追撃せよ。いま一息と眼をやれば南無三！ 大河に劣らざるクリークの前面にぞ横はる。水滿々のクリークは戰車をもては業もなし。

憎ツくき敵と、たちまちに中尉はすてる愛車「にの二號」渡沙の地點なきものや、剛膽不敵にだだひとり淺瀬なきやと、懸命に求むる時に敵彈の飛び來つて、あツと伏す。

さしも剛毅の武士もこの深傷に耐えきれず、されど氣丈の中尉には、よろめく足を踏みしめて、戰車の傍ににじりより、聲はげまして報告す。中隊長殿は愕かれ、詞「西住どうした？ しつかりせい！」『はッ！ 負傷は戦部のやうですから大丈夫です。部隊は左の方から敵を攻撃して下さい。』と云ひ終るや、高松上等兵『打ちたほられたのであります。私たちは彈雨の中を大尉殿を自分達の戰車まで搬んだのでした。』

語る高松、きく人々、ともに暫らく聲をぞなかりけり。

詞 『氣力が次第に抜けてゆく様がありありと分りました。大尉殿は私たちに向はれ、「お前たちと僅か一年で別れるとは思はなかつた。自分が居なくなつても、平素自分がいふてゐた軍人の魂、軍人精神を基として、中隊長殿初め、幹部方の教へに従ひ立派な軍人にならなくてはならんぞ。』

苦しき息の下、死の刻々に迫るなか、從容自若と吾々を誦す言葉の尊けれ。

泣きつつ必死に介抱す、『隊長傷は浅いです』いひたけれどこの深手、敵を攻撃亂射しつ、片手で隊長しつかりと傷の手當に餘念なし、聲も絶え絶え西住中尉。

詞 『細見部隊長殿、隊長殿、西住は御先に満足してゆきます。しつかりやつて下さい。』『お母さま、小次郎は御先に往きます。自分は満足して居りますが御母さまはお一人で淋しいことと思ひます。可愛がつて頂きました。姉さん……いろいろな御世話になりました。妹……立派に……』尙、言葉は若干ありますが、既に力なく、また戰車の轟々といふ響きにききとれぬのであります。』

早や死の迫りて力もなく、最後の氣力ひきしめつ崩れし體とりなほし、天皇陛下……萬歳と、三度は僅かに口の中、愛車の中にぞ息絶えたり。

語り終れば高松は落つる涙のハラ／＼、五臟六腑を一

時に絞るが如き心持して、人眼かまわず泣き倒る。

たれひとり咲き劣りなし梅の花——忠武の兵に等差なし、されど西住戦車長、忠孝義烈世の範ときみ惜まぬ人ぞなし。

二

その昔、神功皇后、三韓御征の御みぎり、戦捷を記念させ給ひて、目出度き甲をば埋められしと由緒ある甲にちなみ甲佐とて山紫に、水清き、村にぞ生れ人となる。

小次郎中尉出征し、早や歳月は夢の如、十ヶ月は過ぎ去りて、銃後を守る老ひの母、姉妹の三人が、只管祈る小次郎が武勳をこそぞ、永遠と。

散るもよし吉野の山の山櫻

花にたぐへし武士の身は

甲佐女學校二年生。西住孝子は母の使ひに友の家、用事を果して學友の鈴子に送られ家路に向ふ道すがら……

詞 『孝子さん。あなたのお兄様は二人ともに立派なお方ね上のお兄さまは大陸の宣撫班、下の小次郎兄さまは勇ましい戦車隊の勇士。』

二人揃ふて祖國の爲、御旗の下にはせ參じ身を棄てての御奉公。口を極めて賞へるに

詞 『今朝も戦地からお手紙が着きました。私すつかり暗記してしまいましたの。』

『きかせて下さらない?』

『小次郎兄さまは、今もの凄しい敵弾のうなりをききながら、戦車にもたれ、お前へへの手紙を書いてゐる。今夜も美しい月夜で、空は澄み、水のやうにきれいな月光を浴びながらかうして戦線からたよりをかいてゐると、つい故郷の山々の姿を思ひ出す』

『まあ小次郎お兄さまつて、おやさしい手紙をおかきになるのね。』

『今頃お前は どうしてゐるだらう? 水清らかな故郷の河岸に兄さんを思ひ出してゐるか、お母さまと、小太郎お兄さまや私のことを語りあつてゐるだらうか。さあ、いよいよ、夜間戦闘に入る。敵もなかなか強い、中央軍の大部隊で、よりぬきの精兵どもだ。しかし、今夜中にこの頑敵を踏みじつて、敵の陣地を占領する爲め、真先かけての戦闘だ。では出動する。さよなら。お母さまを大切に』

激戦のさなかにも妹を想ひ、老ひの母上に孝養せよとや書き送る流石天晴れ武夫ぞ。

詞 『ではおそくなつたから又、明日ね。』

別れて一人歸りなん、挨拶交し駆け出さんとせし其時に、あつと叫んでつまづけば、鈴子愕きかき抱く……。

詞 『おおあぶない? どうしたの?』

『あら草履の鼻緒が切れてしまつたわ。』

『新しいのぢあなくつて?』

『ええ今朝下したばかりなのよ。』

新しき緒の切れるは不吉の報、いひ古された、傳へごと。

別れの挨拶、そこそこに小さい胸を戦のかせ、いつさん駈りに我家にぞ歸り、驚く家の中、親戚、縁者、近隣人、相集まりて尋常事の様子ならざる氣配なり。

詞「お母さん只今」

「おお、孝子お歸り、餘り遅いので心配してゐました。」  
優しく答ふ母上は日頃の母と變らねども集へる人々、聲もなく孝子は異變のありしぞと胸おのゝかせ、にじり寄る。  
威儀を正して差出す、母が手許に眼をやれば、原隊からの

電文なり。

詞「孝子、小次郎兄さまがこの十七日に名譽の戦死をなさいました。」

涙もみせでいふ母に、はつと愕き手にとれば、まがふかたなき公報なり。あの優しの兄上が、と、こみあげ來る哀しみに、わつとばかりに泣き伏せば、母は、かたちあらためて、  
詞「何が哀しくて泣きます。陛下の御爲めに數ならぬ身のお役に立ち、立派に戦死なされた小次郎兄さまに對して泣いてはいけません。泣けば小次郎兄さまの名譽の戦死に傷がつきます。」

焼野の雉、夜の鶴、子を想はぬ親はなし。人、生れたからは死する筈。所を得たるは本懐と、弱き心に鞭打つて、涙を見せるか不覺もの……と娘を叱り。小次郎、母はこの通り厚く禮をいひますぞや、亡き父上や祖先に代り、これ、このとほり、そなたをほめたたへま。す

延元以來幾多ある、盡忠至誠の武夫の青史をかざる地に生をうけ、散りぎわ清き櫻花、まこと、大和のものものと見事

な最後を遂げしかや、心にかかる雲ひとひら(一片)  
まことを知らせ下されよ、けなげな母が人にかくれて差送る細見部隊長への問ひの文。

詞

「天皇陛下のため、皇國日本のため死んでくれた小次郎よ、よく死んでくれた。これが老ひし母の心から小次郎の靈に對する慈愛の最後の言葉で御座います。然し小次郎は何んな死に方をしたであらうか。最後まで潔よく働いて死んでくれたであらうか。詳報のくるまでは心配で心配でたまりません。母は決して泣きはしません。泣けば名譽な貴君の魂に對してつまらぬ母であります。小次郎の靈よ、貴君の靈は今直ぐ母の膝元に歸つてはいけません。貴君の魂は最後まで大陸に止まつて貴君の戦車隊を護りつつあくまで戦つて下さい。これが七世までの御奉公です。」

今は亡き西住大尉の戦歴を繰りてたたえなば、昭和十二年八月、戦車小隊長として出動以來。寶山城の戦闘をはれの初陣に、羅店鎮や大場鎮、南翔、南京と歴戦し、十三年の春深き徐州大會戦、名譽の戦死遂ぐるまで三十有餘の戦闘に身に被りし負傷數、數へるべくもなしととき。愛車に残る彈痕はまさに數へて千六百。しかも一度の戦闘にも休みしことのあるざりき。手も足も常に血染の縞帯に、足の痛めば何くそつと靴をぬぎずて下駄ばきの日夜わかたぬ苦闘録。

御稜威八紘を被ひ、下忠誠を盡す、東扶桑の武夫と春まだ淺く櫻花、征野千里の風に散る。短か命、長き世に、大君の邊にこそ死して顧みず、千代八千代、靖國の神の宮居にとこしえと祭られけるぞとほとけれ。(二月十九日稿)

ラヂオ 淨曲漫評 全五九

〔アナウンサー〕 淨曲漫評のスペースです。出演者の病氣其他で前號にお休みを頂きましたが、御勤めに従ひまして本年も續けることになりました。所で、特に御斷り致しておきます事は、久しく休みました爲め、昨年末の淨曲放送の漫評が下積みのローゼとなつた事でございます。今日に及びまして、昨年のを申上げますと、豚でも笑うと困りますから、斷然割愛致しまして、本年初頭からの分を申上げる事に致します。御諒承を願ひます、尙ほ金丸氏に代つて一言申添えます事は本評は出たと勝負と申しますと語弊がありますが、放送の當夜、周囲のコンディションや又た放送される方の態度や何かで、存外失禮を申上げるかも知りませんが、藝評以外には——イヤ藝に關係のある事以外には、出来るだけ觸れぬやうに心掛けますが、要するに『漫評』の事、御容赦を願ひたいと存じます。中には本當の事を言はれて、痛い所に觸られて、恐ろしく腹を立てゝ執念深く、しつこく怒み言を並べる向きもあるとか聞及びますし、又た金丸を或る新進の評家と勘違ひをして、彼是悪聲を放つ太夫さんもある由に承りますが、面と向つてお世辭ばかり言はれて納まつてゐるさういふ方には、此上本當の事を言つても、注意をしても、蛙のツラに水であらうと思ひますから、蔭介石や無いが『相手にしない』といふ事に致し、太棹社及び其の間違つて恨まれてゐるらしい方に對して、御迷惑な事をコチラからお詫申上げる次第でございます。では、漫評を始めます。

文樂中繼

〔一月三日〕

卅三間堂棟由來

平太郎住家の段

絃 鶴 澤 重 造

豊竹 古靱太夫

大阪文樂座初春興行の第四狂言を、八時五十五分から、時間の許す限り放送するといふ厄介な聴き物、古靱さんの『柳』は、五年振りの演し物とあるが、我等は實に初耳である。文樂で『柳』といへば

今でも始んど鮮やかに耳に残つてゐる先代南部太夫のそれであつたなど、家人と話しくスキツチを入れる『夢やむすぶらん』もオクリになつて、ちよつと一般と違ふ氣がしたが、大體において、此の人ならでは、が隨所に聽かれて、自から膝の進むのを覺えるのである。幽靈は決して泣かない、といふ原則通り、どうかすると、女義などはアハ、と泣く處を泣かぬのも有がたく、一人の子を残しおき（稽古本）のそれを一人の若を、といつたのもよく、次の『枯柳』が馬鹿に妻かつたのも大したものとおもつた。其他ちよい／＼普通と變へられた文句もあつたが『母は佛間の看經に……』へ行つて、愈よ俗にいふ『泥棒』の和田四郎が出て來たが、時間が迫つて來て、氣が氣で無かつた。『どこやらぞどかみ』の妻さ、婆も可ければ、和田四郎が馬鹿に可い、とおもふ中『氷のたまりへおちこちの……』あたりで、アナウンサーの『時刻をお知らせ致します』とが二重放送になり、古靱さんの聲が次第に薄れゆくなどは、心

細いやうなおもしろいやうな、随つて遂に此の人の「氣やり音頭」を聴く事が出来なかつたのであつた。随つて重造氏の絃も……

大阪女義 〔一月十三日〕

### 傾城戀飛脚 新口村の段

竹本 綾助  
絃 豊澤 小住

今は、大阪女義界の堂々たる幹部となつた前名末千代の綾助さん、絃は、いつの間にか日本一のやうに言はれる我が小住嬢？ そして、今夜の「新口」も亦た格好なだし物である『孫右衛門ナ老足の……』から、後半を少し飛ばして「涙々の浮世なり」の段切まで、先づ相當の出来榮えなりと謹聴した『燃捻つて』のあたりの色氣も出たし、大阪を立退いて以下のキカセドコロも、可なり御稽古が積んで居て結構なり『切り株で足ツクナ』は、少し鮮やかさを缺き、時間の都合、追つかけられる形ちは、イヤこれも本文

を利かせての注文か、以上。

東京故老 〔二月二十七日〕

### 菅原傳授手習鑑 松王屋敷の段

竹本 都太夫  
絃 鶴澤 龜造

朝太夫松太夫全盛時代からの都太夫である。随分古い都太夫である。一ト頃首振り芝居など持廻つてゐた時分は、可なり腐つてゐたのではなかつたかとおもはれたが、此の人位近來冴え返り若返つた人は、東京の太夫中にも少ないではないか、或は他界し、或は隠退し、或は、例のパンの關係からといふべきチヨボ語りに納まるが中に、大してお上手とも思へぬ三味線を抱えて、素義の御連中を盛んに製造し、御自身は又た、各方面に進出して、本格的の藝術を頻りに發揮する、時には獨演會すら試みやうといふ勢ひは實に素晴らしいものである。この放送の當夜も、實は日本橋俱樂部に催されたお素人の人形芝居、南北座に一段勤めてか

ら愛宕山へ飛ばしての松王屋敷であつた。サテ其の出来は？ 忌憚なく言へば争はれぬものとして當夜は甚しくお疲れの模様が露はれてゐたのを否む事が出来ない。玄蕃の三枚目敵とドツシリとした松王のヤリトリなど無論今一ト息である。千代は相當に品位もあり、持ち味も出て結構だつた。時間の都合で筋の飛ぶのは致し方なしか。全體我等は、名篇寺子屋の筋をバラしてゆく此の松王屋敷は好ましからぬ語り物と思ふが、近頃割合に流行るらしい。龜造君の絃、文之助時代から見ると、益々腕を上げてゆくのは天窓の好いのと、藝熱心の賜物であらうとおもふ。

文樂紋下 〔一月卅一日〕

### 娘景清八島日記 日向島の段

竹本 津太夫  
絃 鶴澤 綱造

ラヂオ特輯番組週間第三日とあつて、我が紋下の義太夫が楽しめるのである。

この日向島は『盲景清』といつて、故九代目團十郎の家の藝ともなり、今の幸四郎氏も嘗ては帝劇花やかなりし頃上演した事もある。芝居の方でも滅多に現はれないものほどあつて、淨瑠璃の方でも、傳ふる所によれば、去る昭和五年以來九年振りに文樂に上せられたといふ。謡曲『景清』の、傳授物にもなつてゐる例の『松門獨り閉ちて年月をおくり……』の文句なども取入れてあり、津太夫も初演の折、某師に就いて、此の謡曲を傳授されたといふ因縁附の十八番物であると申す、ちよつと珍らしいものなので、ラヂオ初演の事は勿論である。一般に受けなから、屢々上演されないのだ、といふのが常識かも知れず、現に、某専門の淨曲誌が、津太夫は損な演し物をした、と残念がつて居た位であるが、我等は斯うした曲は稀らしいものとしてばかりでなく、結構な大物として大に歓迎するものである。さすが津太夫師である『娘はそれと聞くからに、のうなつかしや御身が父上様かいの……』からの悲嘆、『緋り付

いて泣きければ、父も引寄せ撫でさすり……』のあたり、盲目の景清を髣髴させる。それから最後に、島の俊寛とひとしく、『船よのう、返せ戻せと聲を上げ、心亂る……』の悲痛、絶叫、我が紋下ならでは、とおもはせて感激の一段であつた。幕明き？ に文樂式の口上があり、例のアナウンサー無しであつたのも嬉しいもの、綱造師亦これを授け、謹んでよく引き締めてゐたのはよろしい。

文樂中堅

(二月八日)

安宅關

勸進帳の段

- |     |        |
|-----|--------|
| 辨慶  | 竹本大隅太夫 |
| 富樫  | 竹本織太夫  |
| 義經  | 竹本さの太夫 |
| 片岡  | 豊竹辰太夫  |
| 駿河  | 竹本常子太夫 |
| 伊勢  | 竹本隅若太夫 |
| 常陸坊 | 竹本播路太夫 |
| 絃   | 豊澤廣助   |
|     | 竹澤團六   |
|     | 豊澤新太郎  |
|     | 鶴澤清友   |

何と藝界に勸進帳の流行——と言はんより、寧ろ横行跋扈することよ。此間まで子役だつた役者が、初役で辨慶を勤めると、これが、勸進帳や忠臣蔵といふものを、あまり觀た事のない、生若い連中が、兎も角も、切符を買つて見物に罷り出でる、といつた御時世、それから思ふと、我が文樂の勸進帳なんてへものは、實にテーシタ品物なんである。昭和の頃、名人團平が苦心の作曲、今夜は、一時間の時間を割いて、大隅太夫一卷キがその全曲を聴かせるといふ、唯だ榮三の辨慶が、特に橋がかりでなく劇場の本花道を六法で引込む、それが觀られないだけであり、殊に、相手の富樫左衛門が我等の織太夫君で、ウンと一つ頑張らうといふのであつて見れば、難有い位のものであつた。堂々莊重味を盛つた大隅に對して、一調子高い所を出して織太夫の富樫、問答は勿論かの呼止めのイキなうてへものは結構至極である。タテ三味線廣助師以下何れも御苦勞と申したゞけでは悪いか知らぬが、『一期の涙』から『鳴るは瀧の水』まで、確かにおもしろい事であつた。

鳴物

鶴澤一郎右衛門  
望月天津吉社中

# 義太夫雑話

齋藤拳三

## 吉田榮三自傳

鴻池幸武氏編纂の吉田榮三自傳は、我々の様な人形淨瑠璃愛好者にとつては全く有難い好編である。其の概要は伊原青々園・高安吸江、河竹繁俊の三氏が序文と跋とで餘す所なく云ひつくされて居るが、尙編者に感謝の意味で駄足を附け加へさせて頂きたいと思ふ。

此の種の藝談や自叙傳を編纂する人は隆盛な劇壇にあらば人も多いであらうが衰滅にひんして居る落語講談や、人形淨瑠璃の様な世界には、利欲と名實を度外視して居る人でなければ決して近づく事が出来ない。

人形淨瑠璃や寄席に限り、藝談や自傳

が現はれないのは全く道理至極である。

然も此の種の貴重な藝談は、此處四五年で完全に跡を絶つであらう。即ち人形使ひならば、榮三を最後とする云つても過言で無い。

其處に着眼した鴻池を多としたい。編者はあれだけの話を榮三から聞くに一年を要したと云つて居る。事實、我々關東人がいかに情熱を持つて居ても、いかに番附其他の資料を持つて居ても、榮三からあれだけの藝談を聴くのは何年かゝるか全く見當が附かない。

特に相手が榮三の様な着實な人であつて始めて安心して研究材料となし得るのである。一例が東京の某々の様な自己宣

傳の上手な男では、全く編者が如何に努力しても無駄である。編者が正直一途の人格者で有りながら口述者を過信した爲に、其の著書は案外不完全なものが出来上つてしまつた例は、中々少くない。

人形使ひとの對談は我々關東人は言葉が違ふのと、彼等が筆を持つ人と話をしなれぬ爲に、自他共に甚だ難澁である。

私は縁の下の力持ちの代表的な人形使ひの左使ひの名を知る爲に、樂屋に人形使ひを訪ねた事があつた。すると或る人形使ひは決して此れを公開しない。即ち小割帖を教へない。可成不愉快な思ひをした事が有る。此の様に我々東京人は人形使ひと話をするのも中々大程で無い。

榮三自傳を一枚々々讀んで行くと、實に面白い。特に東京の引越興行となつと一つ一つが懐しい思ひ出の種である。

もう一つ鴻池氏が素直に榮三の藝談を筆記して居るだけで、少しも鴻池氏の人形觀の出で居ないのも、其の謙讓な態度がゆかしく、親しみをおぼへる。かく至難な綴の研究が完成されて居れば、あれを

根幹として横の研究がたやすく出来る。即ち榮三の紋十郎觀を土臺として、新しく別の人からの紋十郎觀を聴いて、紋十郎の研究が出来るのも楽しい。

亦大隅太夫とか組太夫とか多爲藏とか清六とか、私の名のみ聴いてあこがれて居る人の、其の昔を榮三の口から聴くのは中々楽しい事なのである。

私は人形芝居に歡心を持つ若い人には此の書を薦める次第である。

## 床を隠退した

### 三味線弾き

昔からチヨボ語りになる事、チヨボの三味線弾になる事、其れは藝道に對する自殺と云はれて居た。勿論此れは劇場音楽としての義太夫節が、役者や脚本家の藝道を無視した身勝手な注文によつて冒瀆されるからである。然しチヨボ床出演は全く其人の生活の爲の一つの方便であつて、出来るとか出来ぬとかは自ら別問題ではあるが、一方劇場以外では眞劍な精が行はれてるとすれば、其れ程非難攻撃する様は有るまい。

一方、義太夫節によつて成長した、三人使ひの人形が、他の劇場音楽に依つて演ぜられた場合、此れは太棹第九十二號に安藤鶴夫氏によつて精細に論じられて居る。氏は義太夫節以外の音楽によつて演ぜられる三人使ひ人形は、其の弱體を暴露すると云ふ悲哀を人形使ひが少しも自覺せずに、即ち止むなき生活の爲と云ふ謙虚の心持ちよりも、むしろ得意然たる態度を怒り悲しんでるのである。

然し私はまだ床を隠退した三味線弾きの責任態度と云つたものに對しての説を聴いた事がない。

世間では此の場合弾く人がなければ仕方が無いと云つた簡單な一言で片すけてしまつて居る。其れでいゝのだらうか。三味線弾きは弾くべき適當の太夫を失ひば稽古屋になつていゝのであらうか。否、其れは三味線弾きの自殺である。少くも安藤君の「人形價値の暴露」内の言葉を藉りて論ずるなれば、其れは飽く迄止むなき生活上の方便でなければならぬ。

連中のお稽古は一つに生活のカテを得

る爲で、其の活る唯一の道は太夫の養成で有る。三味線音楽は如何に名人でも、其れのみでは獨立した姿をなさない。

いかに正格完璧な朱を持つて居ても、鬼腕を持つて居ても、太夫を弾かない三味線は机上の空論に等しい。

其處に床を引退した三味線弾きの危機が有り地位の至難が有る。

私は豊澤團平は藝の偉き以上に、太夫の養成に心血をそゝいだ點に心を打たれる。

數で數へるのも甚だおかしな話だが、少くも十人の連中に對して一人位の賣人を弾いてやつて望ましい。我々の聴きたい藝談は三味線弾きの名手から上位の太夫を弾いた苦心談で有る。

私は満足な太夫一人彈ひた事のない人から腕自慢の話を聞くのをにがしく思つて、此の拙文をものした次第である。

こう云つた嚴格な見方をすれば、人形淨瑠璃三業の内、三味線弾は一番氣の毒な立場に居ると云つてもいゝ。然し世間には全く反對だ。人形使ひ太夫、三味線の内三味線弾が一番數が多い。其處に私は一つの疑問を持つものである。

# 人名 豊澤松太郎師を偲ぶ

(二)

川 端 柳 蛙

かつた。

當時團平師を中心として文樂座へ對し虹のやうな氣焰を揚げてゐた彦六座にあつて、師は竹本組太夫師竹本大隅太夫師の合三味線を勤め大いに活躍してゐた。この當時が師の最も張切つた、腕も氣分も最高潮に達した得意時代であつたやうに思はれる。

豊澤松太郎師は本名高木松太郎、安政五年大阪上町に生れ、九歳にして三代目豊澤濱右衛門師に入門、師没後初代鶴澤清六師五代目豊澤廣助師に師事し、慶應三年の春十一歳にて天満の芝居を初舞臺とし、それより各座へ出勤した。

昭和五年七月當時世話語りの名人と云はれた竹本内匠太夫師に見込まれ、同師の合三味線として一座を組織して上京した。

當時師は十六歳の少年であつた。在京二ヶ年にして同七年の春歸阪し、直ちに竹田の芝居(今の辨天座)へ出勤して竹本文字太夫師を弾ひた。太夫没後、堀江、市の側、大江橋、御靈の各座へ出勤した。

明治十年二月御靈の芝居(後の文樂座)で『祇園祭禮信仰記』の『天下茶屋の段』で、初代豊竹呂太夫師を弾ひた。この時師は二十一歳の青年であつたが、三段目の本役を勤めた功によつて、因講(今の日本因會)より中老に推選された。その異例な昇身振りは斯界の賞讃の的となつた。

明治十八年先代豊竹駒太夫師を弾ひて彦六座へ出勤した。これより初代豊竹團平師に見込まれ親しく指導を受けるに至つた。師はこの團平師より受けた薰陶を非常に徳とし、世に自分ほど幸福な者はないと云ふて、晩年まで團平師の表像の前にぬかづき感謝を捧げぬ日は一日もな

明治二十六年竹本組太夫師と俱に上京して各席へ出勤し多大の高評を博した。組太夫師歸阪後は東京に止まり、朝太夫師と一座を組織し爾來三十幾年の合三味線として、一日も離れる事なく、日本三夫婦の美談を残すに至つた。

日本三夫婦とは、義太夫節の先祖竹本義太夫師の三味線を勤めた、斯道三味線の祖竹澤權右衛門師は三十一年間終始一貫、義太夫師のよき女房役として、同師にあの覇業をなさしめた功人である。

安永時代の名人竹本長門太夫師の合三味線初代鶴澤清七師は二十六年間夫婦役を續けた。同師は三味線の朱章の考案者で斯道の功人である。後に三代目鶴澤友

治郎を襲名した名人である。

それとこの朝太夫松太郎の夫婦を日本三夫婦と稱し斯界の美談となつた。

昭和二年一月興行より朝太夫師と俱に文樂座へ出勤し、本格的の技藝と謹高な人格は後人のよき指導者として尊敬の的となる事爾來三ヶ年。朝太夫師の病氣により退座と決定せし折は、各方面から惜まれ、紋下竹本津太夫師の合三味線として残るやうにと懇望されたが、朝太夫師存命中は節を曲げずの立前から、八方よりの勧告を振り切つて歸京した。

後朝太夫没後、豊竹古靱太夫師の竹本綱太夫襲名及び紋下昇任問題の起りし折これを機會に是非合三味線として入座指導されたいと懇切な招聘を受けたが、老骨その任にあらずと謙遜して辭退した。

老ひて愈々堂に入つた神技は一糸亂れる透もなく、打撥の鋭どき事は岩をも碎く勢ひにて、師に付いて研究してゐた今の鶴澤寛治郎師の如きは、餘りの偉大さに眞青になつて震ひ上つたと云ふ事である。

この神技を以つて、あの萬夫不當の勇壯の中に玉を轉がすが如き優美な藝の持主である古靱太夫師と、二人並んだ舞臺からどんな大藝術が生れ出るかを絶大な期待をかけたが、終に實現に至らず残念である。

併し師の心境を推察するに、三十年一日の如く一つ舞臺に苦樂を俱にし來つた相手を失ない、再び舞臺へ立つ事は師の性格が許さなかつたのであると考へる。

人氣とか名譽とか云ふ事に全然執着心になかつた師としては、かへつてそれが満足であつた事であらふと思ふ。

師は若年の頃より謹み深き性格であつたので、當時の藝人界にあつたやうな洒脱な滑稽味のある逸話は少ないが、師が生前氣嫌のよい時にぼつ／＼話してゐられた事を、これから追々書いて見ようと思ふ。

師が生涯を通じて忘れる事の出來ないほど嬉しかつた事が三つある。その第一は師の十三歳の時、當時薰陶を受けてゐた初代鶴澤清六師が「艶書合せ」の手に

一寸忘れた處があつたので、松太郎師を使ひとして當時斯界の大先輩であつた、建仁寺町の師匠で通つた五代目鶴澤友治郎師のもとへ聞きにやつた。友治郎師は「こんな子供を使ひによこしたとて覚えられるものではない」と云つて追返した清六師は「この子供なら大丈夫覺えるから手を付けてやつてくれ」と付手紙を持たして再び使ひにやつた。そこで友治郎師は不安心ながら十三歳の松太郎師に教へて見ると、すら／＼と覺えてしまつた、友治郎師は驚いて「この子は今に大物になるぞ」と云つて舌を卷いたと云ふ事である。師は「この時の嬉しさは忘れられぬ」と云ふてゐられた。その後この友治郎師に可愛がられ親しく教を受ける事になつた。

友治郎師は道行物の大家で、當時斯道の人々は皆こぞつて同師から道行物を習つたものである。松太郎師が特に道行物に造詣深かつたのはこの師匠の教訓の賜である。

第二は師が十六歳の時、當時世話語り

の名人と云はれた竹本内匠太夫師が東京興行へ出發するに際し、その合三味線に師が拔擢されて俱に上京した。當時の習慣として上京して興行する際は、重だつた太夫三四人と眞の三味線一二人で上京し、あとは在京の同業者の中から助けて貰つて座を組んだものである。この時も上京したのは内匠師を中心に三四人の太夫と三味線は師一人であつた。

直様東京の同業者と顔つなぎをして補助出演の人選を依頼した。ところが眞の三味線が十六歳の少年であると云ふので、太夫の助け手はあるが三味線の出演者が一人もない『如何によく弾くか知らぬが子供の前を弾く爲めに修行したのではない』と云ふて出てくれ手がない。明日初日と云ふ前日まで同業者の間を奔走している／＼と了解を求めたのだが終に座組が出来なかつた。萬策つきて残念ながら翌日は大阪へ歸らうと荷ごしらへをしてゐる處へ、参加を申込んだ俠男子があつた。それはチャキ／＼の江戸つ子で、しかも芝の名物男鶴澤一二師であ

る『折角はる／＼大阪から上京したのに眞の三味線の年が若いから出演せぬなど云ふは餘りにも肝魂の小さい振舞だ、若い眞打ならなほ是を助けて立派な成績を上げさせるのが同業者の義務ではないか、江戸つ子の風上にも置けない奴等だ、俺が前の四段でも五段でも一人で引受けるから明日から初日を開けなさい』と義侠的出演を申込んだ。一座の人々は初めて愁眉を開いた思ひがした。中にも松太郎師は大層悦び同師の俠氣を謝し、一旦下ろした看板を高くかゝけて初日を迎へた。

當日は同業者の附合で在京の師匠連も大勢集まつた。表面は義理の顔出しだが内心は『小僧が何んな事を弾くか』とひやかし半分の應援である。内匠太夫松太郎の初日の語り物は『妹背の門松、質店の段』である。御簾が上ると、十六歳の松太郎師が『チ、チン／＼』と例の前引を弾き出した時に『アツ』と叫んで座り直した人があつた。それは俠骨一二師の師匠筋に當るその頃東京で大先輩であつ

た六代目鶴澤蟻風師であつた。

お染のサワリの可憐、久作の意見の純情、藏前の悲哀と演じ來たつた時は、此處にも彼處にも感嘆の聲が放たれた。終つて御簾が下りた時は満場の喝采暫しはやまなかつた。中でも蟻風師の如きは眞青になつて感動し、直ちに樂屋を訪問して松太郎師の手を取り絶大の讚美を送つたと云ふ事である。

二日目からは入座希望者續出して立派な大一座が出来、爾來二ケ年間各席を興行し、大成功を納める事が出來た。師が年若くしてこの名譽を掴み得たのも皆一二師の義侠の賜であると大層同師の徳に心から感謝してゐられた。

第三は初代團平師から祕書『工傳』を譲られた時である。團平師には千人の門人があつた。従つて多くの先輩もある。その中から特に師が選ばれて一子相傳の虎の巻を譲られたのであるから名譽此上もないと感動されたのも無理ならざる事と思ふ。

以上の三つを生涯通じて忘れる事の出來ない喜びであるとかよく話をされてゐた。(つゞく)

# 『太棹』總目次 (三) 自第壹號 至第百號

- ▼第廿一號——機運(太棹子)▼新年 語り物の流行り捨たり(仙臺八雲)▼十五句(三宅孤軒)▼宇和島騒動の淨瑠璃(岡田翠雨)▼義太夫藝術論(杉山茂丸)▼義太夫鑑賞に就て(佐藤惣之助)▼淨曲うろ覚え(田中煙亭)▼寺子屋(伊原青々園)▼錦粧軒川柳(阪井久良伎)▼明治初年東京にて上演した新淨瑠璃(豊澤芳太郎)▼竹本劇總勘定(圓城寺清臣)▼浮世の皮肉(明石潮)▼加賀見山(井上驢胖)▼大會と小會(井上驢胖)▼第廿三號——保險(太棹子)▼龍頭(豊澤團四郎)▼義太夫古蹟巡り(豊澤芳太郎)▼豊澤猿喜知(豊澤猿喜知)▼太棹俳壇(芳河土選)▼大會と小會(會報)▼口繪(宛會發會式)▼同幹部の挨拶(同大切掛合)▼第廿二號——此の上の願ひ(太棹子)▼本文樂座問題の眞價を問ふ(岡田翠雨)▼豊澤團四郎・豊澤猿喜知・豊澤猿三郎・
- ▼語り物の流行り捨たり(仙臺八雲)▼淨曲うろ覚え(田中煙亭)▼酒屋の唄(えむ・てい)▼江戸つ子の見た義太夫(泉生)▼素人の耳(不眠生)▼小土佐の新作發表▼義太夫古蹟巡り(豊澤芳太郎)▼豊澤團四郎・豊澤猿喜知)▼加賀見山舊錦繪(一〇)▼太棹俳壇(芳河土選)▼盛況を極めた宛會發會式▼宛會を聴く(井上驢胖)▼大會と小會・會報▼口繪同満員の會場・團の字會新年大會)▼龍頭(太棹子)▼龍頭蛇尾のから騒ぎ(岡田翠雨)▼九段目は楽しんで語りました(竹本土佐太夫)▼淨曲うろ覚え(田中煙亭)▼錦粧軒近什(阪井久良伎)▼春宵句屑(芳河土)▼東劇の先代萩(伊原青々園)▼義曲漫言(里聲生)▼義太夫古蹟巡り(豊澤芳太郎)▼豊澤團四郎・豊澤猿喜知・豊澤猿三郎・

## 會報 投稿 歡迎

### 名作淨瑠璃同好會

川口子太郎

(その一)

別送番組の通り二月廿六日夜文化俱樂部で、名作淨瑠璃同好會第一回を開催致します。

第二回は松林氏の「炬燵」を切にしたいと思ひまして、近松原作でなく半二改修の「心中紙屋治兵衛」として河庄を宮古氏に次に小春の育母の詫住居——小春書置とても云ひますか——十夜の段でせうか——あれを私が語る豫定になつて居ります。それと「國性爺合戦」を鳴蛤、千里ヶ竹樓門に紅流しを掛合と、この二本立て時間を長く、とつておきたいと思つて居りますが、餘り時間がかゝりすぎるやうでしたら、又何とか出し物を變へるつもりです。「夏祭」を團七住家まで通しても見たいし、いろ／＼やりたいものがあるのですが、同人が少くて困ります。古曲に興味のある方がないもので

- 豊澤松市郎)▼加賀見山舊錦繪(十一)  
 ▼思ひ出るまゝ(不眠生)▼越後より(北  
 仙)▼因會を聴く(湯島町人)▼大會と  
 小會・會報▼口繪(因會に於ける朝太夫  
 と松太郎・義太夫古蹟巡りの人々・七代  
 目豊澤廣助)  
 ▼第廿四號——▼太棹評林▼紅紫園雜誌  
 (岡田翠雨)▼隨感錄(中野三允)▼義曲  
 漫言(里聲生)▼櫻五句(芳河士)▼義  
 太夫古蹟巡り(豊澤會)▼聲義會採點表  
 ▼加賀見山舊錦繪(十二)▼聲義會を聴  
 く(井上驢胖)▼五十義會を辭して(三  
 井箕鳳)▼太棹俳壇(芳河士選)▼盛況を  
 極めた本社主催民衆娛樂の夕▼大會と小  
 會(驢胖生)▼信州より(つばめ生)▼  
 會報・兜會消息▼口繪(湯原家の慶事・  
 同披露會)  
 ▼第廿五號——▼近事寸評▼紅紫園雜誌  
 (岡田翠雨)猿廻しは世話物の上乗(竹本  
 土佐太夫)▼淨曲うる覺え(田中煙亭)  
 ▼文樂座將星評(悟園老狂)▼豊澤芳太  
 氏に贈る(小泉蛙鳴)▼嫡男の喪に籠り  
 て(竹本土佐太夫)▼義曲漫言(島田里  
 聲)▼蝶の道行を聴いて(仙臺八雲)▼  
 加賀見山舊錦繪(十三)▼大會を聴く(驢  
 胖・里聲)▼兜會・紅線會・井桁會(里  
 聲軒)▼會報・雜報・兜會消息・其他)  
 ▼口繪(本社三周年記念義太夫大會・豊  
 澤會春季大會・赤坂紅線會)  
 ▼第廿六號——▼花詠月吟▼紅紫園雜誌  
 (岡田翠雨)▼淨曲うる覺え(田中煙亭)  
 ▼文樂座將星評(悟園老狂)▼大會と小  
 會(驢胖・里聲)▼歌舞伎寸評(芳生)  
 ▼金港淨瑠璃勉強會・勝女研究會・竹本  
 座の計畫・文樂座の東上・豊澤會の横濱  
 進出▼各地通信(豊澤新之丞・橋本松帆  
 堂・都筑一鶴)▼會報・編輯を終りて(芳  
 河士)  
 ▼第廿七・八號合本——▼翠樹清泉(翠  
 雨)▼紅紫園雜誌(岡田翠雨)竹本素女  
 の藝格に就て(是澤悟園)▼人形の再興  
 と大衆化(仙臺八雲)▼文樂を觀る(猪  
 俣ベル)▼淨曲うる覺え(田中煙亭)▼  
 藝の苦心と藝の圓熟(竹本津太夫)▼地  
 唄は義太夫と密接の關係がある(竹本土  
 佐太夫)▼淨曲漫言(島田里聲)▼兜會

せうか、何卒、斯道にお顔の廣い御社から  
 同人になつてくれる方を探して頂きたいも  
 のと思つて居ります。  
 なにしるまだ稽古年數も少く、腹も薄く  
 まだ子供っぽい私の、餘りに大それた企て  
 少々氣まゝも悪いのですが、いゝ作が段々  
 忘れられて行くのを見てゐると氣が氣てな  
 いのです。

(その二)

先夜は失禮致しました。お蔭様にて第一  
 回の會「ひらかな盛衰記」大入にて、無事  
 相濟しました。私が慶應の學生でしたころか  
 ら可愛がつて頂いて居ります岡鬼太郎先生  
 がわざ／＼来て下さつて「笹引」を聴いて  
 下さいました。當夜おそく「辻法印」が始  
 った時でしたか、岡田蝶花形先生もお見え  
 下さつたのですが、お願染でないので、失  
 禮に打過してしまひました。お逢ひの節宜  
 しく申上ておいて下さい。宮古さんが御拜  
 眉申上たら、今次は「千本櫻」の通しをと  
 御註文下さつたとかです。一夜では時間の  
 都合で無理でせうから、一段づゝ切離して  
 つけものにして見やうと思つて居ります。  
 おそくなりましたが右御報告迄。

を聴く(井上臚胖)▼野澤勝市を偲ぶ會

▼加賀見山舊錦繪(一四)▼女文樂人形

一座(一記者)▼盛況を極めた東上の文

樂▼豊竹呂昇追善義太夫會▼淨瑠璃研究

會▼豊澤團造改名披露會▼大會と小會

(臚胖)▼五十義會當事者に呈す▼太棹ニ

ユースと根なし草▼會報・消息▼寫眞(豊

竹巴太夫披露・竹本南部太夫披露・野澤

勝市を偲ぶ會)▼カメラは語る(小泉蛙

鳴)

▼第廿九號——▼淨曲の章句改竄を難す

(副島八十六)▼紅紫園雜話(岡田翠雨)

▼義太夫の文句に就て(夏井金石)▼競

伊勢物語に就て(横山松翠)▼淨曲うる

覺え(田中煙亭)▼兜會の人々(暢天

生)▼一人遣人形の本案争ひ(仙臺八

雲)▼加賀見山舊錦繪(一五)▼藝道會

(けむり)▼青山峰水氏より▼太棹ニユ一

ス▼大會と小會(臚胖生)▼女子淨瑠璃

研究會・義太夫豊澤會・淨瑠璃研究會・

竹本素女公演會▼各地通信(都筑一鶴・

北仙・豊澤新之丞)▼會報其他▼口繪(春

日村の段(宮尾しげを)・春日村オンパ

レード(小泉蛙鳴)・豊澤團造改名披露

竹本小春太夫)

▼第卅一號合本——▼義太夫節の神

髓(副島八十六)▼紅紫園雜話(岡田翠

雨)▼五十義會は玄人の研究道場(是澤

悟園)▼淨曲うる覺え(田中煙亭)▼淨

瑠璃學校の可能性(仙臺八雲)▼人形使

であつた家兄の事蹟(岡田翠雨)▼素義

と俳優見立評▼五十義會採點表▼聲義會

の成績▼加賀見山舊錦繪(一六)▼太棹

俳壇(芳河士選)▼大會と小會(臚胖生)

▼晋女會の一夜(S生)▼金川文樂修養

會▼各地通信(松岡安樂・北仙・一鶴・

新之丞)其他▼寫眞(兜會秋季大會・近

藤菊水氏追善義太夫會)

▼第卅二號——▼紅紫園雜話(岡田翠雨)

▼義太夫の文句に就て(夏井金石)▼五

十義會は玄人の研究道場(是澤悟園)▼

淨曲うる覺え(田中煙亭)▼淨瑠璃學校

の可能性(仙臺八雲)▼偲ぶ奥津城▼本

社主催二淨曲大會▼大會と小會(井上臚

胖)▼大日本義太夫因會記事▼因會忘年

義太夫會(臚胖)▼十二月四日の記▼各

地通信・其他▼寫眞(狐忠信オンパレ

ィ・早替りと宙釣りに就て小泉蛙鳴)

## 三 華 會

森 三 好

竹本華代師同三好合同三華會は創設以來熱心強固なる同好愛義諸氏の御後援に依り日を追ふて隆昌に向つゝあり、二月六日は前記東橋亭に於て當會の村雨氏三好出演二月十一日は紀元の佳節を穩して、新宿の角管多加良俱樂部に於て第五回を開演せり。

昨日の寒氣に引きかへ、今日の暖氣に旗日の公休と相俟つて大入の盛況を呈し、和氣靄々裡に當會創設記念撮影を了し、午後十一時散會せり。因に當夜の語物左の如し。

太十前(美佐尾)日吉丸(むつみ)寺子屋前(しげる)寺子屋奥(村雨)先代萩(十三三)先代萩奥(園樂)絃(三好、華代)

尙當會は三月中旬本所菊川俱樂部に於て左の如く開演の豫定なり。

太十前(むつみ)朝顔(村雨)先代萩奥(園樂)酒屋(美佐尾)野崎村(三好)寺子屋(しげる)

以上いろは順。絃(しげる、三好、華代)



# 戯曲の人名(二)

## 豊島丘山人

伊賀越も歌舞伎と院本とを兼ねた作で乗掛合羽道中双六の兩様の外に、伊賀水月の如き實録に近いものもあつて作者は近松半二で、演劇の作者は奈河龜造であるとのことである。脚本講談ともに渡邊靱負の仇討としてあるが、實説は數馬の舍弟渡邊小才治の仇討である由で、此事は晴晴翁が伊賀の上野へ行て事實を調べたと云つてゐる。

荒木又右衛門(實名)替名——(唐木政右衛門) 荒と唐は恰好の替名で、何人でもこれより外に用ゐる文字はなからう。荒木は荒木攝津守村重の末孫であるとも言ひ、又は荒木村の産故荒木と言ふと言ひ、或は幼名が猪丑之助で頼政の家臣猪早太頼次の後裔であるなどとも言ひ何れが實説か。

渡邊數馬(實名)替名——(澤井又五郎) 似口的にて深い意味はない。

川合武右衛門(實名)替名——(石留武助) 荒木の家來で、又五郎と同姓なるも奇縁である。武右衛門では主人の名と紛らはしければ變作したものと思はれる。川合は皮合より石留としたのか、石榴の皮は幾重にも合つてゐる處から皮合……石留……か、これは大のこじつけ。

森孫右衛門(實名)替名——(池添孫八) 渡邊の家來で、森と池添は考へ當らず、孫右衛門は旦那的名故孫八としたものか、武助のやうなものであらう。義經腰越狀——和泉三郎館では豊臣秀頼(實名)替名——(源義經) 後藤基次(實名)替名——(五斗兵衛) 片桐且元(實名)替名——(和泉三郎忠衛) 腰越

# 義太夫いろは歌

## 森 三好

い の 一 番 を 健 康 に  
老 若 男 女 諸 共 に  
早 や く 衛 生 重 ん じ て  
日 本 の 榮 へ 計 ら ん  
外 に も 藝 術 數 あれ ど  
平 戦 兩 時 を 問 は ず し て  
東 都 關 西 全 國 に  
智 恵 博 學 の 愛 義 諸 氏  
理 解 の 深 さ 義 太 夫 を  
主 も 家 内 も 朋 友 も  
累 進 研 究 練 磨 し て  
雄 々 し き 忠 義 や 孝 行 の  
我 が 日 の 本 の 精 神 を  
海 外 迄 も 披 瀝 し て  
世 の 爲 め 人 爲 め 國 の 爲 め  
誰 れ も 語 ら ん 將 た 聽 か ん  
連 戦 連 勝 連 學 に  
雙 方 互 に さ と し 合 ひ  
常 々 和 樂 し あ い く に  
年 中 行 事 の 快 活 に  
鳴 く 鶯 か 人 花 か

狀は義經の實歴であるが、此段は豊臣家の人物を仕組んである。後藤基次は後藤兵衛基國を引用し、酒に因みて五斗兵衛としたものか。

先代萩の伽羅は伊達綱宗の下駄が伽羅であつた處から取つたものか、先代は仙臺で、萩は宮城野の萩を取つて題號を飾つたものであらう。

酒井忠清(實名) 替名——(榮御前) 田村隱岐守(實名) 替名——(沖の井) 板倉内膳正(實名) 替名——(細川勝元) 伊達安藝(實名) 替名——(外記左衛門) 原田甲斐(實名) 替名——(仁木彈正) 松前鐵之助(實名) 替名——(松ヶ枝節之助) 乳母淺岡(實名) 替名——(政岡) 龜千代(實名) 替名——(鶴喜代) 酒井を榮とし、隱岐を沖の井と變作して二人の女を仕立つたのは、御殿場に花を添えたものか。此段は婦人の華美なると、稚兒の可憐なるとを合せて、一入の興味がある。凡て三段目に必ず一名の婦人を加へることが紋切型のやうである。和歌三神に衣通姫を加へ、七福神には辨財天を

加へたのと同じやうなものである。酒井は山名とも替名してあるが、山名細川は應仁の頃東西の大將で双方不和の中に自滅した人々を引用したものか。安藝を外記左衛門としたのは、安藝の附人柴田外記の名を借りしか、仁木は同時代の人で東軍の仁木成長か西軍の仁木教時を採つたものであらう。又綱宗を義綱とし、兵部を刑部。龜千代を鶴喜代は只鶴龜の轉用で、鶴と千代の縁語によつて干松を設けたものであらう。渡邊金兵衛は渡會銀兵衛、妻の八汐は彌汐で、血汐を見る奸惡の意か、又は沖の井の沖に對する八汐か。國姓爺合戰の和藤内は李韜天、吳三桂鄭一官などの如く、明人の常とする三字名を用ひしものか、或は藤氏の内舎人うちいへの時藤内と言ふ由、和は姓で藤内が名であるか。又和藤内は和唐無で、大和にも唐土にも無い設け名の意味か。此和藤内が日本氣宇やまとこころを發揚し、天照皇大神宮の神符を捧げ持ちて猛虎を伏せ、韃靼を破ると言ふ趣向は、實に功ありと賞すべきである。

らむうのるをのくやまけふこえあてきさあゆめしみゑひもせすん  
來輪見たれば明日の პრო  
武藏の東京天狗連  
腕に覺への擴れの席  
今よりお耳に觸れ来るは  
野崎に太十本下の  
奥半分の作曲は  
苦辛の精が溢れとる  
ヤスまず學ぶ精勤の  
益々彌増す素玄會  
今日の時局にまけずして  
奮へや開けや吾が同士  
古典藝術文樂の  
永遠隆昌發達を  
天を拜し地を拜し  
明け暮れ祈る愛養生  
三十三所は花の山  
開いて手を打つ山の段  
夢が浮世で語り出す  
眼の明く御恩は觀世音  
見よ東海の空明けは  
師走を越えて新玉の  
歳徳は昭和の十四年  
日の丸ひらめくお正月  
門弟陸みて新年を  
盛大祝賀し今年の  
すてきな活躍出演に  
んと勇まん發達を



太棹社  
彙報

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。

▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。

▽特種の催はしの外前置きを略します。

—記者—

高瀬操・河野國聲兩氏が

## 五十義會幹部と

# 中老會諸氏を招待

今回中老會が發起で新たに誕生した『大日本素義淨曲競演會』に端を發し、計らずも東都五十義會と面白からぬ風説を生じ、曩きに五十義會の正大闘を引退した五十義會並に中老會の會員たる高瀬操氏は、五十義會理事長細川清氏と野澤道之助師の同部屋の關係上頗る苦しき立場となり、氏の腐心は一方ならぬものがあ

つたが、河野國聲氏が中に立て調停の勞を取り、圓滿なる解決を見るに至つたので、二月廿五日午後六時より大森「三芳」に於て一夕の宴を催し、五十義會理事長細川清氏を始め、同會の幹部諸彦並に中老會々員の諸氏を招待しこゝに兩會のもつれも散じて和氣霽々として、兩會共々美しく相互ひに盡刀する事になつた。斯

道の爲め誠に芽出度き限りで、左に高瀬氏の挨拶を掲げ、兩會の暗雲の一掃した経緯を報道する次第である。

## 御挨拶

今夕は御多用中遠路御厭ひなく御集り下さいました事を厚く御禮申上ます。就きましては昨年末來中老會が主催となり審査會を企畫せられました事は、皆様も御承知の通りであります。其の爲め色々デマ或は中傷等が飛んで、五十義會と中老會との間が面白からぬ空氣が生じた事は、御同様誠に遺憾に堪へぬ次第で御座います。私は五十義會員で又中老會員である關係上、斯る事態に成りましたのも私の責任にあるかの如く感じられ、どうかして感情を一掃し、兩者一體となり斯道發展の爲めに御盡力が願はれぬものかと存じ、親友の河野國聲氏に出馬調停を懇請致しました處、國聲氏も頗る事態を憂慮せられ、五十義會々長細川清氏並に中老會近江清華氏と個々御目にかゝり、親しく御意見を伺ひ、又私等兩人

の意見を中上しました處、潜越なる行動を御咎めもなく、微衷を諒とせられ、五十義會幹事の方に於かせられては、中老會の發會に際しては衷心より出來得る限りの後援をしようと思ふ御快諾を得、又近

江清華氏に第三十回五十義會開催に當りては、中老會を擧げて御後援下さると御約束下さいました。かく御兩所が紳土の本領を發揮せられ、大所高所よりして俱に細事を捨て斯道發展のため御努力下さる事は、何と云ふ嬉しい又感謝すべき事ではないでしょうか。此れで東都素義會も大磐石の如く微動だにせぬ様になりました。誠に御同慶の至りに堪へぬ次第であります。以上述べました如く最早御互の心中何等一點の私心のないは明かでありませんが、尙席を同ふして歡談に春宵を忘するゝは一層親交の度を高むるに有意義ではないかと存じまして、かく御集りを願つた次第でありますから、誠にお粗末でございますが、どうぞ御寛ぎの上、御ゆつくりと御歡談下さる様御願致します終りにのぞみまして、五十義會會長細

川清氏、中老會常務理事近江清華氏並に御參集の御一同に對し益々斯道發展のため御盡力被下様切望すると同時に、微力な私等の言を御認容下さいました事へ深く感謝する次第であります。

尙此の問題に對し同好の士は等しく心配して居らるゝ事でしょうから、如斯兩當事者の一堂に會し和やかな情景を世上同好の志に偏に御知らせ申たいと存じ、其れには通信機關が最も便宜であるので淨瑠璃時報社及び太棹社の御足勞を願つた次第でありますから、報道の儀は御二人さんに呉々御願ひ申上ます。

此度の私共の行動に付きまして、終始變らぬ御好意並に御指導と御鞭撻を賜りました及川旭さん、吉田三芳さんの御厚志に對して、特に深甚の御禮を申上た

いと存じます。尙今回生れ出ました日本素義淨曲競演會の向上發展を衷心より期待致しますと同時に、我東都に於ける由緒ある最も古き、美しき傳統を有する東都五十義會の向上發展に努力致します事は、我々同好者の義務であると迄の信念を持つて居ります。之れは先輩諸賢が多

大の犠牲を拂つて五十義會の爲めに盡されたるに對して、大に感謝の意を表する意味に於て尙然りと存じます。どうか皆様に置かせられても全幅の御援助を惜まざらんことを希つて止まぬ次第であります。

甚だ訥辨ではありませんが、河野國聲氏旅行中で私が代つて御挨拶申上る次第であります。

高 瀬 操

## 出演申込超満員の

# 大日本素義淨曲競演會

淺草「一直」に名譽顧問、相談役、技藝顧問を招待して盛宴を張る

前號既報の通り中老會發企新生の『大日本素義淨曲競演會』は、既に締切前九十名といふ超満員となり、其後續々の申込みも乍遺憾斷るといふ殺倒的の出演申込みで、期日前に締切つて二月廿六日入谷俱樂部で出演順の抽籤會を開き、いよ／＼三月廿三日より三日間竹本叶太夫、鶴澤叶兩氏審査の下に華々しく開催する事になつた。

これに先立ち同會の常務理事中老會は廿六日抽籤會終了後午後四時より淺草『二直』に於て同會名譽顧問、相談役、技藝顧問の諸氏を招き盛宴が開かれたが、席上淺草音女連の『七福神』も會の誕生を祝すに應はしく、芽出度散會した。

なほ同會の名譽顧問、相談役、技藝顧問、常務理事の顔觸れは左の通りである  
名譽顧問 中澤巴(東京) 貴志陵東(大阪) 福田喜撰(京都)

相談役 安藤どくろ、吉岡十八公(大垣) 栗原千鶴、保々長平、鈴木和樂、松尾武市、中道素鶴、片山つばめ、河野國聲、鈴木兎雀、三つ木美登利、鈴

木松實、伊藤松鶴、一色紫光(神戸) 桑原美峰、的野關路、白井清華(以上いろは順)

技藝顧問 竹本津太夫、鶴澤友治郎、竹本米翁、鶴澤觀西翁、豊澤猿之助  
常務理事 中老會(いろは順) 和田春

## 名作淨瑠璃同好會生る

松林福笑氏を顧問として、事務所を「京橋區榎町三ノ五」川口子太郎氏方に置き、『名作淨瑠璃同好會』が生れ、その第一回はひらかな盛衰記二段目より四段目迄通して左記番組に依り一月廿六日夕より文化俱樂部で開催されたが、同會の嘗てない此の試みは「次回には何々を上演して欲しい」などの注文が出るといふ非常な好評である。同會の挨拶並に同夜の番組は左の通り。

### 挨拶

此度私共は、單に机上に於ける作本位でなく、又フシさへよければ愚作でも構

和、北島北斗、西田可松、保谷紅司、原田越巴、柳有明、淺田奇聲、高瀬操、木下松玉、松岡茂里雄、沼井盛鶴、近江清華

事務所 淺草區象潟町一ノ五  
電話根岸一一五二番

はぬ語り本位でもなく、讀み且つ語るものとしての院本名曲の再検討の意味を以て、本會を創立、年數回の試演を思ひ立ち、第一回として「ひらかな盛衰記」を取上りました。

蓋し此作は木會義仲滅亡から一谷合戦迄の木會方、梶原方の動靜波瀾に配するに、鎌田隼人の二人娘、——姉のお筆は木會の没落に伴つて、四天王の樋口と共に苦忠を盡す一方、妹の千鳥は戀人梶原源太の爲に傾城梅ヶ枝となり、無間の鐘に擬へた手水鉢を撞いて鎧質受の金の調達から、生田の森に紅梅を簾にさして源太の出陣迄、全體としての構想の妙は勿

論、只今で云へば敵前上陸たる宇治川先陣争における仁義忠孝、戦線銃後に於ける梅一枝の風流こそ眞の日本精神であり此らの良き道徳が、全篇を通じて、大津の宿の望郷旅愁に、笹川の哀愁に、逆櫓の勇壯或は人の心の温かさに、溢れる詩情を以て描かれて居るからです。

但し、それだけに未熟な私共の力で、此作の良さをどの程度まで表現する事が出来るかは甚心元ないのです。今後一層

の御指導御鞭撻を御願申上る次第です。

### 番組

ひらかな盛衰記Ⅱ(三段目中)梶原館先陣問答(切) 同源太勘當(梶原源太、王華。同平次、宮古。腰元千鳥、子太郎。母延壽、淀橋) 三段目口大津宿屋(王華)

次笹引(子太郎) 中松右衛門内(淀橋) 切逆櫓(宮古) 四段目口辻法印(王華) 神崎揚屋(淀橋) 絃(和孝)

後食堂にて六時迄座談會を催ほした。當日の出演番組は左の通り。

忠六(蘇鳳、米翁) 新口(力、志摩吉)

戀十(松雨、猿玉) 陣屋(游米、團市) 酒屋(越巴、和歌吉) 合邦(美翠、絃平) 壺坂(越駒、紋教、ツレ駒照)

### 清樂會

第七回を一月廿九日入谷俱樂部に開催 近江清華氏は喪中にて休演、第八回を二月廿六日同俱樂部に開催。番組左の通り

(第七回) 哥澤(千恵子) 湊町(朝正)

小唄(とら子) 小唄(和風) 毛谷村(幾子) 哥澤(千恵子) 竹の間(千恵子) 小唄(龜好) 合邦(とら子) 絃(寛三郎、松子)

(第八回) 湊町(朝正) 哥澤(千恵子、芝加駒) 小唄(龜好) 酒屋(和風、千恵子) 小唄(壽美子) 鳴門(千恵子) 小唄(和風) 哥澤(千恵子) 先代(清華) 絃(寛三郎)

## 淨曲無名會

二月の淨曲無名會は河野國聲氏渡支の爲め、十七日を繰上げて十三日午後四時より電気俱樂部に開催。

忠七(國聲、猿三郎) 鳴門(操、道之助) 中將姫(長平、龜造) 宿屋(美峰、猿之助) 太十(どくろ、司好)

## 素玄淨曲研究會

去る一月廿八日麴町公會堂に於てその第五回を公演し、日吉(素鳳、廣助) 寺子屋(北斗、廣助) 杵掛(殿母太夫、辰日正午から淺草松屋ホールに開催、終演

六)にて九時終演後、例に依り一時間座談批評會を催したが、第六回は二月廿七日

# 鶴澤勝鳳師

## 追善淨瑠璃大會

昨年十二月二日八十三歳の高齡をもつて永眠した鶴澤勝鳳師の爲め、勝門會、辰六會、勝女會が主催となり、三月十日午前十一時より日本橋俱樂部に於て、祭壇を初め高座其他の飾り一式を大道具長谷川に一任し、左記豪華番組に依て盛大な追善淨瑠璃會が催はされる。

### — 番 組 —

(第一部) 初手向釋迦八相記(委達太子、清子。耶偷陀羅女、重子。烏陀夷、勝作。阿羅々仙人、壽鳳) 絃(勝八、春)

枝) 佐太村(兒雀、辰六) 忠四(華笑、勝八) 端午(紅司、辰六) 陣屋(太二八、辰六) 吃又(橘、辰六、清市) 瀧(冠之辰六) 紙治(呂光、重子) 本下(葵、辰六) 勘助住家(東司、重之助) 長局(三木子、辰六)

(第二部) 岡崎(井筒、勝八) 大晏寺(春和、辰六) 十種香(白井清華、米翁) 沼津(更雨、辰六) 鮎屋(清、道之助) 講七(近江清華、寛三郎) 忠六(國聲、猿三郎) 岸姫(千鶴、觀西翁) 合邦(巴猿之助) 千本櫻道行(忠信、糸子。靜、重子) 絃(辰六、勝八、勝之助)

## 文樂座人形淨瑠璃の東上

大阪文樂座人形淨瑠璃は本格興行として三月一日初日、四つ橋文樂座で左の番

組にて開演。なほ三月二十日より全員引越興行として東上し明治座に開演と決定

した。

先代萩(竹の間) 政岡(鍛太夫、駒太夫) 鶴喜代(さの太夫) 千松(文太夫) 八汐(相生太夫、織太夫) 沖の井(伊達太夫、源太夫) 小牧(播路太夫、竹太夫) 忍び(常子太夫、相瀬太夫)(新左衛門、清二郎) (御殿) 一切(駒太夫、清二郎) (鍛太夫、新左衛門) (政岡忠義) (伊達太夫、友衛門)

千本櫻(椎の木) 口(富太夫、新太郎) 奥(大隅太夫、廣助) (小金吾討死) (源太夫、吉彌) (文太夫、寛市) (鮎屋) (津太夫、綱造)

新日村(中(辰太夫、千駒太夫) (吉季) (切) (古靱太夫、重造)

壺坂(澤市内(文字太夫、吉左) (壺坂寺) (相生太夫、叶、寛市、織太夫、團六) (友三郎、一郎右衛門)

腰越狀(泉三郎館(伊勢太夫、仙糸) 人形配役(政岡、お里、梅川(文五郎) 鶴喜代(玉男) 千松(文枝) 八汐、彌左衛門女房(小兵吉) 沖の井、内侍(紋太郎) 忍び、藤治兵衛(飄壽呂) 小牧(玉徳) 榮、梶原(門造) 六代、小頭(紋昇)

小金吾(玉幸) 小仙、觀世音(文之助) 善光氏は休演。

太(玉枝) 大之進 道庵(玉市) 彌助(玉幸) 彌左衛門、三郎(玉藏) 村の歩き、傳(兵次) 忠三女房(紋司) 水右衛門

(多三郎) 置頭巾(玉七) 古手買(利男) 八右衛門(萬次郎) 澤市、鷹の谷(政龜)

徳女(榮三郎) 忠兵衛、お里、關女(紋十郎) 權太、孫右衛門、五斗兵衛(榮三)

## 若手會

二月十八日第七回を淀橋俱樂部に開催  
高尾氏は母堂永眠の爲め、柳光、光玉の  
兩氏は病氣にて三氏缺演、平茶氏が飛入  
りて紅一點ならで白一點の同氏は大に若  
返つて先代を力演された。

太十(呂聲、龜造) 陣屋(巽、絃平)

新口(都昇、都太夫) 先代(平茶、子)

渡海屋(子太郎、和孝)

なほ第六回は一月廿四日交正俱樂部で  
催されたが、番組は左の通りであつた。

十種香(都昇、都太夫) 合邦(高尾、  
条造) 壺坂(光玉、龜造) 鬼界ヶ島(子  
太郎、和孝) 太十(呂聲、龜造) 巽、柳

## 綾秀會

一月十二、十三兩日菊川俱樂部に開催

(十二日) 辨慶(綾路) 太十奥(大瓢)

先代(治光) 岸姫(壽光) 柳(綾登) 本

下(壽瓢) 絃(綾秀)

(十三日) 猪名川(扇太夫) 日吉(綾

路) 又助(治光) 白石(綾登) 酒屋(清

壽) 三代記(龍司) 玉三(八雲) 野崎(壽

瓢) 絃(綾秀)

## 第十回 中老會

一月二十七、二十八日入谷俱樂部に開  
催。近江清華氏は喪中にて休演。

(初日) 先代(有明、新兆) 安達(北

斗、廣助) 太十(奇聲、和歌吉) 大晏寺

(春和、辰六) 山名屋(越巴、廣助) 新口

(可松、条造)

(二日目) 組打(有明、新兆) 本下(紅

司、辰六) 白石(茂里雄、清助) 鮎屋(松

玉、松四郎) 酒屋(操、道之助) 赤垣(盛

鶴、条造)

## 皇軍慰問に

### 河野國聲氏

東京製靴工業株式會社取締役河野義  
(國聲)氏は、同社を代表皇軍慰問使とし  
て二月十三日渡支せられた。河野氏は嘗  
て上海事變の際に出征され、又愛國第九  
河野號戦闘機の献納者である。

### 河野國聲氏より

目下支那に來て居ります。今日も一日  
各隊を慰問して只今宿へ歸りました。日  
本のありがたさをつくつく感じましたよ  
支那人もお蔭で安心をして正月元旦(今  
日)を迎へて喜んで居ります。八絃一字  
の出現です。萬歲。

## 『淨曲研究』の發行

岡田蝶花形氏は、素玄淨曲研究會  
の機關誌として「淨曲研究」を發行  
創刊號には第五回素玄淨曲研究會の  
座談會記事、待つ間もとけしの解釋  
(岡田蝶花形) 淨曲質問等を掲載。

# 豊竹伊勢太夫

## 文樂座へ入座

三月興行より文樂座に入座出演する豊竹伊勢太夫は、七歳で富子と名乗つて豊澤富助の門に入り、富助出京後先代豊澤廣助に就き練磨、十八歳にして豊澤富太郎と改名したもので、披露は堀江座で故人竹本雛太夫を弾き、また時折現今の竹本座に出勤してゐたが、昭和九年太夫に轉向して伊勢太夫を襲名して竹本座の中堅として聲量素質共に俱はつてゐた。今回竹本古靱太夫一門に列し、六世豊竹伊勢太夫として文樂座に入座したものである。

## 竹澤龍造一座

好評裡に四國九州路を巡業中の同一座は、五月竹本角太夫師を始め各男女太夫合同で大阪、京都、神戸の三ヶ所にて開演する由であるが、二月より四月迄は左の通り賣切れの盛況である。

吳市(辨天座) 山口縣岩國(錦座) 廣

島縣廿日市(公會堂) 同大野(大野劇場)  
同木の江(甲樂座) 岡山市(大福座) 岡山縣味野(味野劇場) 同井原(井原劇場)  
同矢掛(有樂座) 同玉島(鷹港座) 門司市(稻荷座) 博多市(大博劇場) 佐賀市(佐賀劇場) 長崎市(八幡座) 久留米市(惠比須座) 別府市(別府劇場)

## 野澤語三郎師

### 追善義太夫會

野澤語左衛門師の門弟で、宇都宮で師匠をしてゐた野澤語三郎師は、病氣の爲め久しく房州木更津で靜養中、遂に十一月末死去、享年四十八。去る二月十九日午後四時より交正俱樂部で、野澤語左衛門師主催、同語三、語勇、語作師連出演のもとにその追善義太夫會が催はされた  
初手向、上かみや(糸樂、語勇) 太十(小松、語左衛門) 杏掛(語曲、語左衛門) 十種香(富士子、語左衛門) 妙心寺(語作連) 先代(向樂、語左衛門) 寺子屋(十三三、語勇) 身賣(有曲、糸樂)

かに・天ぷら

御料理

深川區白河町一ノ六

(區役所通り)

二葉

錦 さと

各席語り物帖より

左記の催しは番組の御送付又は通信に接しないもので、會名のある催しだけを各席の語り物帖から二月迄の分を拾つたものです。落ちがありましたら御用捨を願います。(記者)

東京聯合義太夫會 名古屋の  
名古屋屋 社本氏上京を機に、一月九日夜文化俱樂部

部で東京名古屋聯合義太夫會を開催。

紙治(六花) 安達(北壽) 沼津(清香)

酒屋(都山) 寺子屋(社本) 逆樽(乃菊)

絃(佳照、清一、清二、清三)

●朝見會 一月十八日交正俱樂部に

開催。

辨慶(小口) 日吉(周樂) 百度平(松

香) 沼津(壽樂) 先代(昇朝) 帶屋(井

孝) 合邦(一竹) 絃(朝見太夫)

●良友會 一月二十六日交正俱樂部

に開催。

十種香(みなと) 合邦(梅笑) 先代(司

樂) 鳴門(山生) 布四(義雀) 絃(良造)

●長友會 第二回を二月九日小石川

俱樂部に開催。

辨慶(大嘉津) 十種香(松雨) 本下(和

國) 山名屋(依) 絃(仙十郎、猿藏)

●三人會 二月十四日小石川俱樂部

に開催。

朝顔(一好) 壺坂(いづみ) 太十(と

くろ) 絃(司好、仙玉)

●勝八會 二月十五日交正俱樂部に

開催。

忠四(華笑) 酒屋(冠之) 太十(未成)

佐太村(井筒) 鮎屋(紅司) 絃(勝八)

●互調會 二月二十四日交正俱樂部

に開催。

日吉(佳世子、佳照) 梅由(山生、鹿

重) 又助(義雀、良造) 合邦(二三樂、

蝶子) 志度寺(乃菊、佳照)

●かたばみ會 久しく休演中であ

つた猿藏、猿三郎連の『かたばみ會』は

二月二十六日小石川俱樂部に開催。

本下(大嘉津) 喜内(和狂) 辨慶(山

門) 堀川(其甫) 絃(猿藏、猿三郎)

●辰六會 二月二十六、七の兩夜入

谷俱樂部に開催。

(二十六日) 安達(太二八) 忠四(華

笑) 河庄(清子) 本下(葵) 太十(冠之)

絃(辰六)

(二十七日) 沼津(春和) 長局(三木

子) 寺子屋(紅司) 四つ谷(兒雀) 絃(辰

●兜會花組 第三十回を二月二十

七日交正俱樂部に開催。

布四(美浪、團八) 合邦(團壽、米翁)

新口(其晶、都太夫) 帶屋(和可葉、猿

三郎) 五斗(松蝶、米翁) 先代(三葵、

寛三郎) 陣屋(春樂、松四郎) 寺子屋(泉

司好) 酒屋(八雲、美浪)

## 豊澤湊太夫師の逝去

豊竹湊太夫師は急性肺炎にて二月十一日午後十時四十分急逝、十四日午後一時より二時迄中野の自宅に於て告別式が執行された。同師は豊澤團七の長男に生れ十三歳にして二代目豊澤團平の門に入り團次郎と名乗り、十五歳の時攝津大塚に就いて小さの太夫となり文樂座に出勤、それよりさの太夫と改名し、湊太夫は昭和五年三月襲名したものである。享年六十二、追悼の意を表す。

本誌後援名譽會員

(イロハ順)

(東京之部)

廣瀬いろは氏  
岡崎 四六氏  
吉川 浪補氏  
阿部 一氏  
北島 北斗氏  
中澤 巴氏  
安藤どくろ氏  
吉田 登盛氏  
小川 都山氏  
安藤 都昇氏  
保々 長平氏  
栗原 千鶴氏

神馬 里芳氏  
本木 大熊氏  
鈴木 和樂氏  
小林 和舟氏  
本多 可笑氏  
飛石かなめ氏  
加藤 兜氏  
高橋 可遊氏  
西田 可松氏  
大用 大嘉津氏  
田口 辰壽氏  
疋田 大龍氏  
井上 巽氏

小林太二八氏  
根本 團壽氏  
野田 高尾氏  
坂倉 素遊氏  
浮谷 祖樂氏  
川口子太郎氏  
小埜長とろ氏  
宮本 武藏氏  
萩原うつぼ氏  
乃村 乃菊氏  
中野 吳羽氏  
山下 彌生氏  
國井 丸都氏  
松林 福笑氏  
鈴木 兒雀氏

水戸部 壽氏  
原田 越巴氏  
河野 國聲氏  
松岡 語松氏  
田中 湖月氏  
寶藏寺 天昇氏  
大築 葵氏  
松本 朝章氏  
及川 旭氏  
柳 有明氏  
寺岡 三幸氏  
木村さかえ氏  
齋藤 山生氏  
平井 榮氏  
細川 清氏

岡田 源氏  
 野口 みなと氏  
 横井 三由氏  
 吉田 美地 旬氏  
 高瀬 操氏  
 岩田 末成氏  
 吉良 蟻若氏  
 岩木 義雀氏  
 猪谷 銀水氏  
 川奈部 銀司氏  
 歸山 歸世花氏  
 淺田 奇聲氏  
 錦 錦松氏  
 井田 菊泉氏  
 金田 金鳳氏

北村 三葵氏  
 池田 三國氏  
 吉田 三芳氏  
 佐野 美昇氏  
 鈴木 松寶氏  
 菊池 秋月氏  
 平井 壽樂氏  
 山田 壽瓢氏  
 田口 司重氏  
 濱口 秋華氏  
 武笠 宏亮氏  
 高品 一重氏  
 桑原 美峰氏  
 松岡 茂里雄氏  
 白井 清華氏

近江 清華氏  
 湯原 清司氏  
 沼井 盛鶴氏  
 時田 靜史氏  
 (地方之部)  
 米國平野 一昇氏  
 同 武 榮玉氏  
 同 杉山 陶岳氏  
 同 兼廣 廣玉氏  
 同 西本 西紫氏  
 榑太宮下 杉鳳氏  
 横濱田島 集樂氏  
 大垣 吉岡十八公氏  
 下關 保良 鈴鳳氏

名譽會員

川口 子太郎氏  
 佐野 美昇氏

本誌後援名與會員を御快諾  
 賜り難有奉深謝候

太 棹 社

# 當座帳

- ▽鈴木和樂氏 病氣靜養中。
- ▽星野桔梗氏 芝區琴平町十三番地へ轉居。
- ▽小林隅斗氏 淀橋區上落合一丁目一七七番地へ轉居。
- ▽寺岡三幸氏 世田谷區池尻町三八六番地へ轉居。
- ▽阪井久良伎氏 一月廿四日夕より神樂坂「未よし」にて七十一回誕辰會を開催。
- ▽田中巖氏 慰問使として渡支。
- ▽川口芳民氏 同上。
- ▽田口司重氏 臺灣視察に渡臺中の同氏は二月二十五日歸京。再び滿鮮より北支に出發の由。
- ▽栗島狹衣氏 二月一日青島より上海南京へと皇軍慰問の爲め、栗島すみ子劇團を引率して渡支。
- ▽竹本佳仙 淺草區馬道三丁目十二番地へ轉居。
- ▽竹本米翁 淺草區象湯町一丁目四番地へ轉居。
- ▽豊澤猿糸 京城府新町一八番地へ轉居。

## 編輯後記

▽竹本扇賀太夫 竹本扇太夫と改名。  
 ▼豊澤延左衛門 本郷區駒込神明町二六六番地へ轉居。  
 ▼竹本陸路太夫 大阪市北區堂山町十六番地へ轉居。  
 ▼豊澤廣助 電話北八〇五八番開通

★漸く寒さも薄らぎまして、本月からは鶴澤勝鳳師の追善淨瑠璃會を皮切りに、大日本素義淨曲競演會、これに俱ふ試演會と、いよゝ義太夫の好季がやつて参りました。

★本號は意外の延刊、何んとも恐縮の至りに存じます。これには、二月は廿八日月をうっかり致しをり、その爲め一日發行の新聞或は會報など、かち合ひましたり、それに印刷所の手不足、いろゝ事情がありました事で、何卒御容赦を願上ます。

— 芳生 —

(行發日五廿回一月毎)		號 二 百 第		料告廣	價	定
特	普	一	一	一	一	一
別	通	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一
頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁
金	金	金	金	金	金	金
參	貳	貳	貳	貳	貳	貳
拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓

昭和十四年二月廿三日印刷納本  
 昭和十四年二月廿五日發 行  
 東京市小石川區音羽二丁目二四  
 編輯兼 發行人 富 取 壽 鹿  
 東京市牛込區早稻田町五八  
 印刷人 栗 原 榮 松  
 東京市牛込區早稻田町五八  
 印刷所 栗 原 印 刷 所  
 電話牛込一四五一番

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます  
 ▼誌代は總て前金御拂込の事  
 ▼なる可く振替に御送金の事  
 ▼郵券代用は一割増但三錢切手  
 の事

東京市小石川區音羽二丁目二四  
 發行所 太 棹 社  
 振替東京三一七八五番

近刊

# 東都素義名流大鑑

(非賣品)

東都素義界に未だ名流大鑑のない事を遺憾とします。弊社は皆様の御近影に平素御愛用の語り物を始め、師匠名並に所屬會名其他の略傳を付して、近日『東都素義名流大鑑』の刊行を企てました。

尤も今までに、小さな寫眞を出して、それに出鱈目のおさすり記事を大盛りに盛り並べて、二十圓、三十圓といふ金を要求したのもある由承りましたが、本大鑑は寫眞本位として、一頁金拾貳圓、四六倍判、上質アート装幀の高雅は、皆様の机上に一層の光彩を添へる事と存じます。何卒御申込を賜り、弊社の此の企畫を御援助賜り度御願ひ申上ます。

太  
棹  
社

ト一パア級高  
 莊 綠



○五二ノ二町淵岩區子王  
 裏局便郵・車下口東驛羽赤

番一八一六谷下話電は又莊弊接直はみ込申御  
 いさ下用利御を(田坂)

昭和十四年二月廿三日印刷  
 昭和十四年二月廿五日發行

(毎月一回廿五日發行)

太

棹

(第百二號)

定

價

金

參

拾

錢